

ことりの古民家ごはん
小さな島のはじっこでお店をはじめました

如月つばさ Tsubasa Kisaragi



アルファポリス文庫

「できたっ」

折り紙で作ったピンク色のチューリップを、蛍光灯の光にかざした。茎と花の境目には、赤いラッピングリボンを蝶々結びにしたものを付けた。

「可愛い」

嬉しくなつて、絨毯に伸ばした両足をばたつかせる。先に書いておいた手紙と一緒に封筒に入れて部屋を出た。

風呂場の脱衣所には、もう少しで帰ってくる父のために、新しい着替えとバスタオルが用意してあった。リビングの扉を開けると、私が食べた夕飯と同じハンバーグの匂いがした。帰ってすぐに食べる父の食事が、テーブルの上に並べられている。

「ママ」

ベランダの窓の向こうを見つめたまま、気付いてくれない。立ち尽くした母の虚ろな目は、眼下の夜景ではなく、どこか遠くを見ているようだった。

「ねえママ」

穿き古した部屋着のズボンを少し引つ張ると、母は驚いた顔で私を見下ろした。

「ごめんね、気が付かなかった。どうしたの？」

私の目線に合わせるようにしゃがんだ母に、「じゃーん」と背中に隠していた手紙を見せた。

「ママ。お誕生日おめでとう」

「これ……ママにくれるの？」

「そうだよ。お誕生日プレゼントなの」

するとどういいうわけか、母の目に涙がじわりと浮かび上がった。ごめんね、と恥ずかしそうに笑いながらトレーナーの袖口で目元を拭い、赤切れが目立つかさついた指で封筒を開けた。

「上手。このチューリップ可愛い。蝶々結びも自分で作ったの？」

私が力強く頷くと、「とつても綺麗にできてる」と何度もやり直して端がほつれたリボンを指で撫でる。

「えへへ。手紙も見て」

早く、と急かすようにその場で足踏みをした。母は膝にチューリップをのせ、手紙を取り出す。母の瞳が左から右へと行ったり来たりした。頑張つて綺麗な字で書いた

つもりだけど、読みにくかっただろうか。

ようやく顔を上げた母の手が私を抱き寄せた。耳に押し付けられた温かい胸の中から、心臓の音が聞こえる。

「ありがとう。ありがとう、ことり」

そう言う母は「手、見せて」と開いた私の手のひらに自分のそれを重ねた。母の手は薄くて細長い。

「ことりの手はこんなに小さいのね」

「だってまだ四歳だもん」

負けたような悔しい気分になって、片方の頬を膨らませた。そんな私を見て、母の口元が緩む。

「ふふっ、そうよね。こんなに小さいのに、ママを笑顔にさせてくれる、優しい手。いろんな幸せを作れる手……」

そう言うとき、まるで痛みに耐えるかのように眉をひそめる。さっきとは違う、悲しそうな涙が母の頬をこぼれ落ちた。

「どうしたの？ ママの手も優しいでしょ」

母の頬を伝う涙を親指で拭ってみた。だが、すぐに次の涙が落ちてきてしまう。

「ううん。なんでもないの。ことり、もう一回、ぎゅーしようか」

「うんっ」

飛び込んだ母の胸は、お日さまみたいな匂いがする。

「ことり、大好きよ」

「ことりもだよ」

安心するぬくもりに頬を擦りつけていると、玄関の鍵を開ける無機質な音がして、母の心臓の音が大きくなるのがわかった。

父の影が扉の向こうに近付いてくる。

咄嗟に私から体を離して立ち上がった母の膝から、封筒が滑り落ちた。

第一話 ことりと豆苗

「つてなわけだからさ。来月ね、そっち戻るから。予定は一日。よろしくね」

「ただの腰痛でわざわざ来なくてもいいのに。仕事だって辞める必要ないじゃない」

「違う違う、その仕事先が三月末で閉店なの。どのみち暇になるから大丈夫」

「あら、そうなの？ せっかくだいい職場だったのに……。とりあえず、帰ってくる日は港まで迎えに行くね」

「ちょっと、腰痛持ちが迎えになんて来ないでよ。余計心配になるでしょ。それにもう二十六だよ。アラサーの娘なんだから心配しすぎ」

「……まあ、じゃあ考えとく」

明らかに納得していないのが丸わかりの母の声に笑いを堪えながら電話を切った。

1Kの六畳間に幅を利かせている布団を畳んで部屋の隅に追いやり、代わりに一人用の丸テーブルを慎重に引く張る。水を張ったプラスチック皿に豆苗の根が浸かっているのだ。昨夜、卵と一緒に炒めて食べたばかり。まだつんと刈り立ての芝生状態だけ。

豆苗が再生できるということは知っていたが、実際にやったことはなかった。スパーで八十円で売られていた豆苗。今まで動物はもちろん、植物も含め、命あるものは育てないと決めてきた私が豆苗を育てている。

こんな気が起こるのも、きっとあの男のせい。

肩にかかる黒髪を一つに結び、カーキ色の合皮のトートバッグにスマホを突っ込んだ。白からアイボリーへと変色したスニーカーを履き、ドアチェーンをそっと外す。

築四十数年のアパートの、重く軋む扉を押し開けた。

三月に入り、通勤途中の景色も淡い桜色に染まり、過ごしやすくなってきた——と

いうのも「一般的には」の話だ。

蝶も小躍りしたくなるような麗らかな陽気も、狭く風通しの悪い弁当屋の厨房にガスコンロが合わされると、あつという間に灼熱地獄となる。一応エアコンは点いているが、全開の店頭から仕切り一つしかないこの厨房はなかなか冷えない。

絶えずカタカタと異音を立てる扇風機のおかげで、ぎりぎり立っていられる状況だ。

「ことり、唐揚げ弁当、二十七個だつて」

「えっ、今から？ あつっ——」

コロツケをフライヤーに入れた拍子に右手の甲に油が跳ね、小さく悲鳴を上げた。咄嗟に水で冷やす。じんじんとした痛みが引くより先に、きつね色に揚がったコロツケを引き上げた。幸い、同僚の水島隼人は気付いていないらしい。窓際の棚に子機を戻し、「三時から花見なんだつて」と弁当を袋に詰めてお客さんに手渡した。

隼人がこの店に面接に来たのは二年前。店主自身が高齢で店に立つのも厳しくなり、一日も早く働き手が欲しいということで即日採用した。

男性が大の苦手な私を自己紹介直後から呼び捨てにするし、私が「水島君」と呼ぶのを「きもい」と一蹴した。構わず水島君と呼んでも、そのたびに「隼人」と指摘する強引な人間。それが水島隼人という男だ。

そんな隼人は働き始めたばかりの頃、何もかもがきこちなかった。言葉遣いや態度

を無理して矯正している最中だったようだ。「つす」と言いかけては、慌てて「です」と言い換える。ときにはお客さん相手に苛々している様子も見取れたが、それでも本人なりに心を落ち着けようとしていた。鼻息荒くゆっくり肩を上下させる姿を何度も見た。

それがいつしか苛々する回数も減っていき、彼の短所を長所が大きく上回る状態となったのだ。今となつては私より高いコミュニケーション能力を活かして、注文を受けるのもつばら隼人。私は常に厨房で調理担当となっている。

ビジネス街の公園にあるこの店は四十年続く老舗弁当屋だ。開店と閉店のときぐらいにしか顔を出さない店主——ミツさんという高齢女性が営む、見た目も古く、お世辞にも綺麗とは言えない店。そんな洒落っ気もない店に私と同年代、まして年下の店員なんて来ないだろうと踏んでいたのに、隼人は二十三歳だった。神様はなんて意地悪なんだろう。試練を課す人間を随分と偏らせてはいないだろうかと思も立つ。

まあ、そんな関係ももう少しで終わりなのだけれど。

「二十一番さん……秋山さん、どうぞ」

「はいはい、ありがとうね。ことりちゃん、厨房暑いでしょ、大丈夫？」

製菓会社に勤める秋山さんが、カウンター越しに厨房を覗き込んだ。円形の地肌を軽く覆う程度の薄毛頭が、レジ横からひょっこり見える。

「大丈夫ですよ。ありがたいございます」

まだ少しひりつく手で菜箸を持ち、油の海で泳ぐ大量の唐揚げと対峙する。首に巻いたタオルが噴き出る汗を吸い込む。老体に鞭打って稼働する扇風機の健気な風も、この気温では温風となってしまうていた。

客足が落ち着いた頃、「よし」と隼人が手を叩いた。二時だ。サンプルが並ぶ陳列台を白い布で覆い、カウンターに準備中の札を立てる。通常であればこれから一時間の休憩だが、唐揚げ弁当二十七個の注文を前にした私はそういうわけにはいかない。

最初の頃は大量注文もあったが、有名飲食店の進出や、会社での行事ごとを苦手とする世代が増えたのもあって、ここ三年ほどはまとまった注文はなかった。

網の上に山積みになった唐揚げはこんがりきつね色だ。最後のグループをフライヤーからすくい上げた。

冷蔵庫から、きんぴらごぼうとたくあんを取り出す。それから玉子焼き。ポテトサラダの入ったボウルは——ぎりぎり二十七個のお弁当分はあるだろうか。でも午後からの注文を考えると、また仕込んでおかないと。

「あとは詰めるだけだろ？ 俺がやるよ」

「いや、でも……」

「あ、俺にはできないって思っただろ」

隼人の眉が吊り上がる。疑うような眼差しに睨まれた。

「別に、そういうわけじゃなくて——」

隼人は、ちつちつち、と人差し指を顔の前で左右に動かし、ニヤリと口の端に笑みを浮かべた。

「ふふん、ほら見る」

エプロンのポケットからメモ帳を出すと、挟んでいたルーズリーフを広げた。

「これ、なんですか？」

開いた紙には、弁当八種類の絵が描かれていた。

不器用な私が密かに羨む、隼人の特技の一つ。きちんと色鉛筆で色まで塗られた弁当の中身には、お惣菜の名前が記されている。その字もまた達筆。金髪で耳に穴が六つも空いている能天気男がこんな字を書くななんて、恐らく世界中、誰も思わないはず。隼人はその紙を厨房の壁に押しピンで留めて、弁当箱を作業台に並べた。

「俺、馬鹿だからさ。効率よく厨房で動けないけど、こうやってきちんと見れば弁当を詰めるくらいはできるんだぜ」

お客さんが商品を取りに来るまで一時間。他の総菜と唐揚げを詰めるだけで。確かに間に合う。

「本当にお願ひしてもいいんですか」

「お願ひって、俺もこの店員だし。水分取って休んでなつて。時間余つたらポテサラ用のじゃがいも茹ゆでとくわ」

「じゃあ……すみません。お願ひします。何かあつたら呼んでください」

「了解、任せろ。つーかなんで謝つてんの」

けられらと笑うと「じゃ、あとでな」と手を振る。袖を捲まくり上げ、背を向けて菓箸を手に取った。メモを凝視ぎょうししながら弁当を詰める後ろ姿。汗染みが広がるグレーのTシャツの背中の、金色の昇り龍と目が合う。もう少しでこの人ともお別れだ、と胸裏で呟つぶやいて階段を上った。

自信満々な隼人は嘘をつかなかった。十五分前には詰め終わり、お箸とおしほりも準備し、無事にお客さんに渡すことができた。ポテトサラダ用のじゃがいもを茹でくれていたのもあって、午後の仕込みも難なく終わり、無事に閉店時間を迎えられたのだった。

隼人が洗った雑巾を干し、私はレジに鍵をかける。店舗の奥にある住居部分からミツさんが出てきたのは、五時を少し過ぎた頃だ。

「じゃあまた明日。おつかれさま」

店を出た私に、ミツさんが声をかけてきた。

「おつかれさまでした。ありがとうございました」

「こうして話すのも、あと少しだと思つて寂しいねえ。でも仕方ないよね。店も私ももう年だから。引き際だもんね」

言いながら、ミツさんがシャッターに手を伸ばす。きい、がらがらと甲高い錆びた音がオフィス街に響く。半開きのシャッターの下から「またね」と恵比須顔で会釈すると、一気にシャッターを下ろした。

昭和な装いの寂れた弁当屋を覆い隠すようにそびえるビル群れから、仕事を終えた人たちが手にしたスマホに視線を落としながら出てくる。まるでどこで曲がるか、どこに信号があるか、見なくてもわかっているかのように。視線は変わらず手元にあるのに、交差点の歩道の縁かどで足を止め、青信号を知らせる音と同時に横断歩道に踏み出す。足早に駅に向かうスーツやオフィスカジュアルの服装の人々が、地下鉄へと続く階段に吸い込まれる、見慣れた風景。

——ミツさんの手は魔法の手だよな。

いつだったか隼人が言った。

——あの人の手から弁当が生まれて、何十年とお客さんに愛されてきたんだぜ。確かにそうだ。種類様々な弁当は、数年前に亡くなった旦那さんが考えたものもあ

るらしい。ミツさんにとっては、夫婦の想い出の詰まった店なのだろう。

飲食店はいくらかでもあるのに、ずっとこの店に通い続ける常連が多い。そして新入社員の若い人まで、この現代的な町には明らかに異質な、古く傾いた弁当屋に足を運ぶのだ。ミツさんの手が魔法の手なのは間違いない。

「そんなふうに生きられたら、人生も充実するのかな」

自分が誰かを幸せにできるなんて、到底思えないけれど。

夕照に染まるビルのガラス窓を見上げる。ここを辞めたらこの景色を見ることができなくなるのだと思うと、少し寂しい。サドルにまたがり、ペダルに足をかけた。

「あれ？ ちょっと、何してるんですか」

「掴まえた」

いたずらっぽく笑う隼人に、自転車の後ろの荷台を掴まれていた。こういうノリが本当に苦手だ。とにかく距離が近い。そしてこの派手な外見。こういうタイプはきつと喧嘩っ早くて、口が悪くて、すぐに他人を威嚇する。どう見ても私とは生きる世界が違う人だ。怒りのスイッチがどこにあるかわからないのが怖い。出会って三秒で「苦手な人」のカテゴリに迷いなく割り振られた。まあ、一度も怒られたことはないのだけれど。

「弁当屋、今月で終わりだろ」

「そうですね」

試しにもう一度ペダルを踏み込んでみるが、タイヤはびくともしない。この男、涼しい顔で喋りながらも、荷台を掴む手にしっかりと力を入れているらしい。ため息交じりに汗でべたついたうなじを撫で上げた。結んだ髪も、なんとなく湿っている気がする。

「ごはん行こうよ」

「私はそういうのは……」

「えー、今日だけ。早いけど、お別れ会的な。もしかして嫌？」

「そういうわけじゃないです」

私の顔を窺うような視線に、慌てて頭を振った。

「大げさなことしなくても。バイトですし」

「バイトでも社員でも関係ないじゃん。ね。ここ辞めたら一生会えないかもしれないんだよ。寂しくない？」

「一生って……」

寂しくないと思います——さすがに口には出せず、心で留めたけれど。

どうしてこの人はこんなにも関わろうとしてくるのか。これまでの人生において彼のようなタイプから声をかけられたことはなかった。無意識に人の顔を窺ってしま

う私に友達は一人もいない。自分で言^ひって虚^{むな}しいけれど事実だ。

「ことりはお酒飲める人？」

勝手に話を進める隼人が、「ほらほら」と自転車から降りるように催促する。諦めて降りると、ようやく荷台から手を放してくれた。

私は「いえ」と頭を振った。飲めないわけじゃないがお酒は苦手だ。特に、誰かが飲む隣にはいたくない。お酒を飲んで性格が豹^{ひょう}変^{へん}する人だったらと考えると怖いのだ。

「お、いいね。俺も。じゃあ駅前のバスタでいい？ ほら、新しい店できたじゃん。昼間はすげえ行列だけど、この時間は空いてるっぽいんだよね」

この春に新しくできたバスタ屋さんは、店から五軒離れたコンビニの前まで行列ができる人気店だ。昼間の長蛇の列に並べるほど、弁当屋の昼休憩は長くない。どうせ近いからいつでも行けるという安心感も相まって、結局一度も行けずじまいだ。

なぜか「俺が押していくよ」と自転車を押す隼人と、並んで歩いた。きっと私が逃げないようにするためだ。信号待ちをしながら、隼人は出張中の友人から預かっているというメダカの話 시작했다。これまで命あるものは育てないと決めてきた私が、豆苗を育ててみようと思っただけがこれだ。日々成長していくメダカたちの姿を事細かに教えてくれるのを聞いているうちに、なんとなく気になり出した。

——朝、起きる楽しみができたんだよね。

そんな一言で、豆苗を育て始めた。

「スマホ鳴ってない？ 鞆^{かばん}の中かな」

横断歩道の中頃で、私のトートバッグから着信音が聞こえた。

「電話じゃない？」

視線がバッグに向けられる。スマホを取り出し、画面に表示された見知らぬ番号を確認したのと同時に音が止まった。履歴を見ると、仕事にも少なくとも五回はかかってきていたようだ。

「かけ直さないの？」

横断歩道を渡り切った所で足を止めた隼人を、ゆつくりと追い抜いた。

「いいの？」

「うん」

スマホをバッグの内ポケットに突っ込み、ファスナーを閉めようとして、指先が滑る。手が震えていた。隼人は「ふうん」とだけ言うと、他愛^{たあい}のない話を再開する。

もうすぐ桜が満開になるね。来週の雨で散らないかな。子供たちの入学式まで残っているといいな——そんなふうに、自分には関係のないことを本気で願っているようだった。

動悸^{どうき}を誤魔化すように、ゆつくりと呼吸をして……唇を噛み締める。

「ごめんなさい」
「ん？」

モスグリーンの屋根にレンガ造りのバスタ屋がもうすぐそこに見える。私は隼人が押す自転車のハンドルを掴んだ。

「やっぱり今日は帰ります」

「ちょ、どうしたんだよ急に——」

自転車を奪い返し、トートバッグをかごに放り込んだ。

「すみません。さようならっ」

思い切りペダルを踏み込む。信号の音、車の音、行きかう人々の声。雑踏に埋もれるように、もう何回目かわからない着信音が、バッグの中で鳴り続けていた。

アパートの玄関で電気を点けると、暗い和室で豆苗が迎えてくれた。部屋の隅にバッグを放り、豆苗の水を替える。視界の端に、放り出したバッグが映り込んで嘆息した。スマホを出し、八件の着信と表示された画面を指でスライドする。登録していない、知らない番号。思い当たるのは一人しかない。

さつき郵便受けに入っていたチラシを広げた。怒り任せに団子状に丸めたそれは皺だらけになっていた。裏面に殴り書きされた言葉。留守だったことに腹を立てたのだ

ろう。感情に任せた字は、誰が書いたものか一目瞭然いちもくりようぜんだった。

どうして電話に出ないんだ。一度話がしたい。

家も、電話番号も知られた。この果てしない執念深さには恐怖を覚える。空っぽの胃袋の底から吐き気がこみ上げた。

これを書いたのは私の父だ。生物学上の父親。私にとってはそういう存在の人間。離婚して父と母は他人になれても、私と父は他人にはなれない。血の繋がりがあると言われればそれまでだ。でも、できるのであれば、そんな繋がりは永遠に断ち切りたい。気持ちだけで言えば、赤の他人でしかないのだ。

幼いとき——物心つく前がどうだったのかは知る由もない。ただ、一番古い記憶である幼稚園の年中あたりには、すでに恐怖心は芽生えていて、両親が離婚した小学三年生の頃には、私の心は真っ黒に塗りつぶされていた。年齢が上がるにつれ、その感情は恐怖から嫌悪感へと変わっていく。

それはきつと一般的な反抗心がもたらすものではなく、父が私たち——主に母にしてきた精神的暴力を目の当たりにしたせいだ。感情のままに、暴言を吐く。物事が上手くいかないのは母のせい、私のせい。怒り、不満、そういった感情を家庭内にま

き散らし、母を追い詰める。怒声と罵倒^{ばとう}。私が怪我をしても、成績が悪くても、全てが母のせいだった。私が悪いのに、私のせいなのに。母を庇^{かば}おうとすると、お前も里美にそっくりだな、と私もまとめて罵るのだ。

離婚して二十年近く経つ今も私たちを捜^{さが}している。私の居場所を突き止めた父への嫌悪感が膨れ上がるのがわかる。理由は知らない。何が目的なのかも知れないが、知りたくもない。

気持ち悪い。むかつく。

どろりとしたタール状の黒い感情が心に流れ込む。苦しくて、悔しくて。息苦しさを感じながら、チラシを壁に投げつけてうずくまる。掻^かき塗り、爪を立てた頭皮に痛みが走る。広げた指には鷲掴^{わづつか}みにした髪が数本絡まっていた。

翌朝、豆苗にはカビが生えていた。陰鬱な私の暗さが豆苗に悪影響を与えたんじゃないか。一生懸命再生しようとしていた豆苗に、心底申し訳ないと思った。カビの生えた豆苗は、謝りながらゴミ箱に捨ててしまった。

桜はあつという間に満開になり、町中をピンク色に染め上げていた。桜の名所でもある町の北側を通る川沿いには人が列を成し、この時期以外では全く見向きもしない桜の木を晴れやかな顔で見上げていた。

どこか浮かれたような世間を横目に、今日も私は弁当屋へ向かう。三日続いた雨風にも負けず、桜の花は枝にしがみついていた。無残にも散って赤茶に傷んだ花弁が地面を覆ってはいたものの、新たな蕾^{つぼみ}が開花の時を待っている。

——このままなら、入学シーズンには桜が残ってるかな。

隼人はやっぱりまだそんなふうに言っていた。正直私にはどうでもいいような話に、できるだけ平静を装って「そうですね」と答えた。

三月末で閉店する弁当屋。だが、私はその日より一週間早く仕事を辞めることになった。エプロンを腰に巻いて厨房へ入る。シャッターを開けた隼人が陳列台の布を剥がしているところだった。

「無理に働かなくてもいいんだよ。引っ越しの準備とかあるんじゃないの」

弁当容器を吊り下げ棚に補充しながらミツさんが言う。

「出勤前に宅配で送る荷物は詰めてきましたし、不動産屋にも連絡は済ませたのであるの。細かい手続きは明日終わらせて、明後日には出られるはずですよ」

ミツさんは「そう」と心配そうに眉をひそめた。

「ことり」

「あ、はいっ」

隼人が「そろそろ」と時計に視線を送る。九時半だ。慌てて仕込みの材料を取りに、

冷蔵庫を開いた。

「ことりちゃん、おつかれさま。はい、最後のお給料。今日までの分ね」

二階の更衣室で着替えを済ませて階段を下りた私に、ミツさんが茶封筒を差し出した。

「ありがとうございます。このエプロン、今日中に洗って明日返しに来ます」

「ああ、いいのよ。それ貰つとくね。はい、どうも。今までありがとうございます」

しわくちやのミツさんの恵比須顔を前にしたら急に胸が詰まる。目がしらが熱くなって、ミツさんの姿がぼやけて映る。その向こうに隼人がいるのが見えた。

泣いちゃ駄目。閉店の日を前にして、私はここを辞めるのだ。それも身勝手な理由で。「いつかはこういう日が来るのはわかってたけど、いざとなると寂しいもんだねえ」

私はもう何も言えなくなつて、ただ「ありがとうございます」と深く頭を下げた。人付き合いが苦手な私を優しく受け入れ、一から料理を教えてくれたミツさん。今年で七十九歳になるはずだ。

「ことりちゃん、元気でね」

「はい。ミツさんも、お元気で」

またミツさんに会いたい。だが多分それはもうできない。父とのことがある以上、

私はここに戻ってくることはない。本当にこれが最後だと思つたと鼻の奥がツンとする。決壊しそうな涙を堪えて、ごくりと唾を呑み込んだ。

ミツさんがシャッターを下ろす間際に見せてくれた笑顔と、無機質なガラス張りのビル群がふいにとても綺麗だと思つたことは、一生忘れないだろう。

それから二日後、私は母が一人で暮らす島へと向かった。千円で買った、異常にキヤスターの音がうるさいキャリーケースを引きながら電車を乗り継ぎ、片道チケットを買つて船に乗り込んだ。陸路がないわけではない。それでも船を選んだのは、陸地から次第に遠のく風景を目に焼き付けておきたかったからだ。

この場所へは帰れない。そう心に刻むように。

揺らぎそうになる感情と決別するために。

私はいつまで父に振り回される人生を送るのだろう——甲板の手すりを強く握つた手のひらに、筋状の赤い痕が浮かぶ。これからどうしよう。ミツさんの弁当屋という居場所を失つて、島でどうやって生きていけばいいのか。

隼人は店を辞めたあと、どうするんだろう。ふとそんな考えが過つたが、そんなのは私には関係のないことだ。

ぼー、と響き渡る汽笛を合図にコバルトブルーの海へと放たれた連絡船が、遠霞に

ぼんやりと浮かび上がる対岸へと動き出した。

第二話 津久茂島・風の丘地区

津久茂島。

本州から橋一本で繋がる小さな島だ。土地面積はおよそ二十五平方キロメートル。人口は五千人弱。年齢層は高齢者が半数を占めている。ここで育った子供は高校から本州の学校に通うことになる。実際、私も本州の高校で寮に入った。

小学校は島全体で三校。中学は一校しかない。昨今の田舎ブームの波に乗って移住者は増えているものの、定年後の夫婦や単身者が多く、子供の数は伸び悩んでいるようだ。

甲板の手すりに腕を乗せ、次第に近付いていく港に目を細める。この船の乗客の家族や友人だろう、津久茂港の堤防に、まばらな人影が見える。どの人も名前までは思い出せないのだけだ。

私がこの島で暮らしたのは中学の三年間だけだ。両親の離婚後に母子生活支援施設で小学四年生まで暮らし、施設を出てからは大阪で二年。地方移住者支援という制度

で母が介護に従事することを条件に、中学入学と同時に津久茂島へ引っ越した。

母が島の人たちと懸命に親交を深めようとしているのを目の当たりにしても、思春期の私はとてもそんな気になれなかった。一日のほとんどを家と学校の往復で終えていた私は、島民とは挨拶程度の関係にしかならないのが現実だ。

浮遊感に吞まれないよう足を踏ん張る。船尾のベンチに座る女性が前のめりになって、膝の上のリュックに顔を埋めていた。日焼けで真っ黒の若い船員が付き添っている。

「あつ、お——」

うつかり「お母さん」と港に手を振りそうになって、我に返った。胸の前まで上げた手は、行き場を失くして意味もなく襟元を掴む。

母だ。介護の夜勤中にぎっくり腰になったと嘆いていた母は、迎える人たちの輪から少し離れて立っていた。なんとなく猫背になっているようにも見える。

「おかえり、ことり」

最後に船から降りた私を、亀のような歩速で迎えた。

「ただいま。ねえ、腰痛いんしょ」

「大丈夫、心配しないで。バスで来たし、痛み止めも飲んでから平気」

声は電話で聞いていたし、写真もスマホで送ってもらっていたが、実物は写真で見るとよりもしっかり老けていた。

今年で六十五歳になる母のほうれい線を含む皺は、化粧気のない肌にくっきりと刻まれていて、たれ目はたるんだ皮膚に吞まれていた。乾燥気味のショートカットの髪は灰色と白が入り交じり、姿はしつかり「おばあちゃん」だ。

白い半袖のシャツワンピースに、茶色いつつかけ。ワンピースのポケットからスマホを取り出した母は「一時間に一本しかバスがないの。タクシーを呼ばなきゃね」と画面をスライドし、タップする。スマホを前後させ、眉間に皺を刻んだ。

「老眼、酷くなったんじゃない」

母は画面を見たまま顔をしかめて苦笑する。

「そうなの。人間って駄目になるときは早いんだから。丸山タクシーってこの番号よね？」

スマホの画面を見せられて頷くと、母は安心したようにタップして電話をかけた。

タクシーが港についたのは十分後だった。車内に乗り込むやいなや、運転手のおじさんが「森野さん、こんにちは」とルームミラー越しに会釈をし、そのまま視線を左にずらして私を見た。

「娘さん、帰ってきたの。久しぶりだねえ」

まるでよく知った間柄のような口ぶりに、運転手さんと自分がどこで会ったのかを思い出せないまま「お久しぶりです」と返した。助手席に立てられた名札には、わざ

とらしいような黒々とした七三分けヘアのためき顔のおじさんの写真。その下には丸山幹夫と記されていたが、やっぱり覚えていない。

港から山沿いに進み、島の中心部でもある津久茂商店街を抜け、私の母校の津久茂中学を横切る。大通りを走り、道路標識が現れた。

直進すると白鷺地区。右に曲がれば風の丘地区だ。

タクシーは右に曲がり、住宅街を抜け、田舎ならではの広すぎる坂道を上り、林道に入る。折り重なる枝葉の向こうに、私が三年間を過ごした集落が見えてきた。

風の丘地区は集落の周りに緩やかな山々が連なり、人々が住む村は窪地になっ
て、この林道のある丘から見ると、大きなお椀の中に広大な畑と民家が点在しているように見える。

さつき標識に見た白鷺地区は水田が広がる、米作りが盛んな集落だ。

この島で一番栄えている商店街と、津久茂港のある陽ノ江地区。

陽ノ江地区の隣にあるのが、津久茂川が流れる星野地区だ。あそこは牛や鶏を育てていて、中学の校外学習でアイスクリーム作りを体験した記憶がある。

そんな津久茂島は車なら一時間程度で一周できてしまう。狭い島での暮らしは人々との繋がりも密接なのだと、母子生活支援施設で聞かされていた。その頃唯一仲の良かった子が以前住んでいた場所が、そうだったらしい。本人はそれをネガティブ

なこととしては捉えていない様子だったが、思春期の私はそれが煩わしく感じてしまった。

実際島に来て、大人どころか同級生とも上手く馴染めなかった。子供同士で話しているつもりでも、あつという間に大人にまで広がってしまう。そんな環境に慣れない私は、人と必要以上に関わるのを避けてしまっていた。

タクシー代の支払いの際に振り返った丸山さんの顔を正面から確認したが、記憶にはない。毛虫みたいな太い眉毛も、カッラにしか見えない七三分けの丸いためき顔も、やはり覚えていなかった。

そして、自分の家の前に立つても「懐かしい」という感情は抱けなかった。地方移住者支援で紹介された中古の二階建て一軒家は、あの頃と変わっていない。甲高い音で軋む錆びた門扉も、そこに針金で括り付けただけの赤い郵便受けも、丸い石が玄関まで蛇行する狭い庭も、玄関の寂れた引き戸の音も、どれを聞いてもまるで「他人の家」だ。

普通であれば、こういうときは郷愁を感じたり、しみじみ思ったりするものだろう。自分自身がいかに無感情にここでの三年間を過ごしていたかを改めて確認しようで、同時に自分の子供時代が酷く空虚に思えた。

二階にある私の部屋は、中学時代で時が止まっていた。掃除や空気の入替えて母

が立ち入った形跡はあるが、筆筒たんすの上の技術の授業で作った木材加工のオルゴールは、一音も欠けることのないメロディを奏でていたし、修学旅行のお土産で買った柴犬の博多人形が今もテーブルの上に。ひよこ饅頭まんじゅうの色褪いろあせた上蓋が壁に飾ってあった。

キャリアケースを部屋の隅に置いて窓を開けると、部屋を巡った甘い風が、前髪をかき分けて額を露あらわにする。風の丘地区を囲う低い山々は、淡い桜色に染まっていた。

家の裏側に広がる畑に、もんべ姿の人の丸い背中からお尻にかけてが見える。作業の合間に背中を反らして伸びをして、また丸くなる。畑の脇には自転車が停めてあるから、向こうの住宅地の人のだろう。

この家は風の丘地区の入り口に位置し、向かいに大きな日本家屋があるだけだ。そこから畑沿いに進んだ先は住宅が密になっていて、個人経営の雑貨店や商店、地元の人が集まるお好み焼き屋さんもあったはずだ。

こととあちらの住宅地の間に延びる長いあぜ道の左手には畑が広がり、右手は桜並木が彩る土手がある。土手の反対側は津久茂川の支流となる穏やかで浅い川が村を縦断している。この地区は土の匂いがとても濃い。畑に実る作物や花、秋にはどつざりと実を付ける柿の木がある、彩り豊かな地域だ。見える景色は十年前となんら変わっていないかった。

土と、桜と、緑の香り。それらを打ち消すように、カレーの匂いが漂ってきた。一

階に下りると、母が昼間に作ったというカレーを温めていた。流し台と反対側の壁にかけてあるうつすらと埃をかぶった時計は、五時を示していた。

「私がやるよ。お母さんは座ってて」

「これくらいできるよ」

椅子に座って鍋をかき混ぜる母からおたまを取り上げ、隣の六畳の居間へ手を引いた。しっかりと脂肪を溜めた母の二の腕は、しばみかけた水風船みたいだ。

二人分のカレーをよそい、母の向かいに座った。

「ねえ、明日どこ行こうか」

「いや、どこ行こうって……」

まるで休みを前にした幼稚園児に訊ねるみたいに、母はスプーン片手にテーブルに身を乗り出す。

「無職だし。お金も節約しなきゃ」

すくったカレーに息を吹きかけて、ゆっくりと口に運ぶ。私が好きなところからカレーだ。とろとろ、というか最早どろどろカレー。スプーンからぼたっと落ちるくらいが好きなのだ。大きいじゃがいもが入ったこのポークカレーが、子供の頃から大好きだった。

ああ、お母さんのカレーだな、と味わいながら次のひと口をすくう。

「いいじゃない、少しくらい。お母さんも働いてるんだから、お金は気にしないで。

商店街に新しい喫茶店ができたの。うちの地区の畠中さんのお孫さんがやってるんだけど。浩二君、覚えてない？ ことりの同級生。クラスも同じだったんじゃないかな」

「へえ……」

畠中、畠中、畠中浩二、と頭の中で唱えてみたけど出てこない。女子の輪にすら入れないで孤立していた私が、男子の名前なんて覚えてはいるはずもないのだが。

「いや、その腰で行けないでしょ。治ってからにしようよ」

どうせその浩二君とやらも覚えてないんだし。と心の中で独り言ちてまたカレーを頬張る。美味しい。カレーは飲み物だなんて言う人がいるけど、私もそうかも。

母はどうしてもどこかへ出かけたのか、「じゃあもう少し近場でお散歩とか」などと食い下がる。「私はここに住むのだから、いつでも行けるでしょ」と説得すると、ようやく諦めてくれた。まるで散歩を断られた犬みたいにしょんぼりとしていて、罪悪感が全くないと言えば嘘になるのだけれど。

そのあと私はカレーをおかわりした。母は一皿目のカレーすら「お腹いっぱい」と言い出したので、それも貰うことにした。結局二皿半食べたことになる。

夜になると、外に出てみようかという気も起きたが、母のあの様子だと「私も行く」とか言い出しそうな気がして、やっぱりやめた。

十年も前で時が止まったままの自室の窓辺に座る。
お腹はいっぱい。風が気持ち良い。

昼間はあんなにも桜色に染まっていた風景も、今はすっかり夜の闇に沈んでいた。黒い山々の稜線が村を囲み、遠くには民家の明かりが白く灯っている。畑の向こうの山の中腹で、石灯籠が淡い光を滲ませていた。

母と初詣で行った神社だ。こぢんまりとした神社ながらも歴史は古い。神社仏閣に興味がある観光客がぼつぼつと訪れる、マニアックに分類される神社だということを数年前に本屋で手にした日本の隠れ絶景写真集で知った。実際に絶景だったかどうかは、初詣という夜中にしか行っていない上に、寒すぎて足元しか見ていなかったからわからない。

今朝まではコンクリートジャングルの町にいて、昨日まではオフィスビルの足元で働いていたのに、今は海に囲まれた小さな島で田舎の夜の景色を眺めている。父のことがなければ、島に戻るつもりはなかったのに。

部屋の隅にキャリーケースと一緒に放り出していた鞆の中から、スマホの振動音が聞こえた。まさか、と思った嫌な予感的中した。

父だ――

三十秒ほどで留守電に切り替わるが、そのまま切れた。それでも昨日までの焦燥感

はない。アパートは夜明け前に出てきた。早いうちに家を離れ、適当な店で時間を潰してから津久茂島への船の時間を調整した。引越しの荷物は最低限に抑え、梱包が大きくなるものは処分した。不動産屋の退去の立ち会いも、事情を伝えるとスーツではなく普段着で来るような配慮をしてくれる人なのも救われた。これだけ対策をしてきたのだから、見つかる心配もないはずだ。

父は、もぬけの殻になったアパートを見て愕然としたことだろう。

スマホ、解約しよう。

母と住むのであれば連絡を取る必要もないし、どうせ友人もいない。調べ物がしたければ、陽ノ江地区にある役場に併設された図書館にでも行けばいい。車はなくても自転車もバスもあるし、どうせ暇で時間はいくらでもある。

窓を閉め、電気を消した。布団にもぐり、目を閉じる。数日ぶりに、穏やかな気持ちのまま眠りに落ちた。

その夜、夢を見た。あの弁当屋での日々の夢だ。

隼人が注文を受け、私が厨房で調理し、お客さんが「ありがとね」と弁当を持ち帰る。「ごはん行こうよ」

隼人の軽い口調が懐かしい。結局、行けないままで終わっちゃったけど。

夕景に浮かぶ能天気な笑顔は、オレンジ色の強い西日に包まれて見えなくなった。

「あつつ……」

布団の上で大の字のまま呻く。目覚めは最悪だった。触らなくても背中が湿っているのがわかる。前髪の生え際を指先で擦ると汗がべっとりと付いた。

視線だけで頭側の壁掛け時計を見る。十時五十分。青い遮光カーテンの隙間から漏れる陽の光は、引きこもりのアラサーの眼球には刺激が強すぎて顔をしかめた。

五月に入ってから、島の気温は容赦なく上がり始めた。まだ夏どころか梅雨も前だというのに二十五度を超えている。

一階に下りると、母は仕事に出たあとだった。冷蔵庫にオムライスが入っています、温めて食べてね。ケチャップは冷蔵庫の扉の右側です——凡帳面な小さな字で書かれたメモが、居間のテーブルに残されていた。余白には私が幼少期に好きだったカエルのキャラクターが描いてある。過保護なのは相変わらずだ。こういうのも、私が子供の頃から変わっていない。

あれから母の腰はすっかり良くなり、これまで以上に頑張らなくちゃと昨夜も随分と意気込んでいた。オムライスを食べ、シャワーを浴びてからまた部屋に戻った。こっちに来てからずっとこれの繰り返しだ。満腹の二十六歳女は、畳んで積み上げた布団に上半身を乗せるようにして仰向けに転がった。これぞ食っちゃ寝。

開けた窓の向こうの電線に止まった一羽のカラスが、不思議そうにこちらを見ている。小首を傾げて、カァー。あいつ昼間から何やってんだ？ とでも言っているのか。カラスはしばらく私を観察してから、ばさばさと黒い翼を羽ばたかせてどこかへ行ってしまった。

私もあんなふうに自由に生きられたらな。まあ、はたから見れば良い年した無職の人間が実家で暮らしている姿は、自由そのものなのだろうけれど。

その日は午後二時を過ぎると薄雲がかかり始め、気付けば雨が降り出していた。うたた寝する怠惰な私を起こしたのは雨の音ではなく、古臭いチャイムの音だった。

「あらあ、ことりちゃん？ 引越してきたって聞いてたのに姿を見ないから、どうしたのかと思ってたら」

家の前にいたのは、見事な大仏パーマのおばさんだ。五十代くらいだろうか。傘を持つ手とは反対の右手をぽっこりと出た頬骨に当てて、

「大きくなつて。おばちゃん、覚えてる？ お母さんがツバキさんって呼んでるでしょ」と言う。

「ああ、ツバキ屋さんの」

ようやくこの島に来て初めて人の名前と記憶が一致した。ただ、私の記憶にあるツバキさんは大仏パーマのおばさんではないが。

「そう、ツバキ屋の椿^{つばき}マサエ。もうおばさんになっちゃって。わかんなかったわよねえ」
ツバキ屋は向こうの住宅地にある個人商店だ。雑貨や文具などを取り扱っていて、私も学生の頃はノートなどを買いに行ったことがある。大らかで声が大きい人というのが印象に残っていて、今はその「大きい」に体のサイズも加わっている。

「ちょうど前を通ったらベランダに洗濯物が出てたから。声かけなきゃと思って」
「ありがとうございます。取り込んでおきます」

母が仕事前に干したものを片付けた私は、また暇になって部屋に戻った。
囁く^{ささやく}ような雨音が聴覚を満たす。流れ込む生ぬるい風は、湿気と緑の匂いが入り混じっていた。

五時を告げる音楽が、灰色の霧に包まれた村に静かに響き渡る。洗濯物を取り込む以外何もしていない私の腹の虫は、完全に息を潜めていた。

三月までは、毎日が本当に忙しかったな。

考えれば考えるほど、心まで今日の空みたいな灰色の雲に覆われて、ため息が出る。天井の木目が私を見下ろしていた。生産性もないこの時間も嫌いじゃないが、毎日続くと焦りが生まれる。母以外、会話する相手もない。寝て、起きて、食べて、また寝る。そんな毎日だ。

「ミツさん、元気にしてるかな」

私のことも少しずつ忘れてしまうのだろうか。私は忘れないけれど、相手もそうだとはいえない。母と離れて暮らす私にとってミツさんは本当のおばあちゃんみたいな存在で、休憩時間にミツさんとお茶を飲むひとときは、家族のぬくもりのようなものを感じた。そんな大切な場所を失くしてしまった。店を開けても、父のことさえなければ会うことはできたはずだ。でも父のことがある以上、ミツさんの傍にいれば迷惑をかけてしまう。

両親が離婚してこんなにも年月が経っているにもかかわらず、私は父に振り回されてばかりだ。なんか悔しい。

よいしょ、と心なしか重くなった体を起こし、勉強机の引き出しを開けた。中学のとき、一目惚れで買ったレターセットを机に置いて、椅子の座面を下げる。ミツさんに手紙を書き、畑沿いに竹むポスト^{たす}に投函した。返事が来たのは一週間を過ぎた頃だ。

ことりちゃん、元気そうで安心しました。私も元気だけど、閉店した弁当屋の片付けのときに転んでしまってたね。それからは隼人君がよく様子を見に来てくれるの。

ことりちゃんの新しい暮らしはどうですか？ 確か、津久茂島だったよね。
いつだったかテレビで特集していたのを見て、素敵な所だと思ったのを覚えています。

読みながら「へえ、隼人が」と呟いた。今までの恩があるとはいえ、辞めた職場の雇い主を氣遣って見に行くなんて、誰でもできることじゃない。ノリが軽くて能天気な彼なりに、いい所もある。もちろん一緒に働いた二年間でわかってはいたことなのだけど。ちょっと微笑ましいような気持ちになりながら、便箋を出してペンを取った。良かったですね、安心しました。津久茂島はとても静かでもいい所です——。ミツさんがそれ以上手紙を書かなくて済むような文面で送った。それでとりあえず終わるつもりだったのに、それから二週間近く経って、また手紙が届いた。

急にごめん。ミツさんに住所教えてもらったんだ。

ことりの親父だって人が店に来たよ。もう辞めたから知らないって言っておいたけど、結構しつこく居場所を聞かれた。大丈夫か？

達筆な文字で書かれた手紙の文末には、水島隼人と記されていた。

第三話 梅雨の紫蘇ジュース

津久茂島での暮らしは、相変わらず退屈な毎日だ。隼人からの手紙に返事を出してから数日。父に店を辞めたことを伝えてくれてありがとう。迷惑をかけてごめんなさい。もう店には来ないと思います。こちらは大丈夫です。そう返事を書いてからは音沙汰がない。

父のことを考えていても気が減入るばかりなので、陽ノ江地区の商店街に行くことにした。母が言っていた、私の同級生の喫茶店を店の前から覗いてみた。店内には入る勇気がないが、店主の浩二君らしき姿は見ることでできた。

浅黒い肌に、手足も顔も私よりずっと細く、身長は百六十数センチだろうか。黒縁眼鏡に団子鼻の、清潔感のある純朴そうな青年だ。ブラウンのシャツに黒いエプロンの落ち着いた立ち姿と振る舞いが、イギリスビンテージな店の雰囲気と馴染んで、彼がいるだけで絵になる。

浩二君が営む喫茶クラウンを覗いた帰りに役場の図書館に立ち寄り、新刊コーナーを右から左へとじっくり見て回った。その中で一冊、『小さなカフェの作り方』とい

う水色のパステルカラーの表紙が目を惹いた。その日はカフェの作り方の本と小説三冊、なんとなく手に取ったガーデニング番組で有名な人の庭作りの本を借りることにした。

時間を持って余す私は一週間かけて三冊の小説を読み切り、庭作りの本を斜め読みしてなんとなく「丁寧な暮らし」気分を味わうだけ味わって、返す本の山に積んだのが今朝。

雨続きでさっぱりしたものが食べたいと言った夜勤明けの母と、冷やしうどんに総菜屋のとおり天をのせて朝昼兼用ごはんを済ませた。

「小さなカフェの作り方」

表紙のタイトルを読み上げて、窓辺の砂壁にもたれた。今朝までしつこく降り続いた小雨もようやく止み、雲の切れ間から水色の空が見える。地上に差す細い陽の光が空気中の水分を含んで、光の粒子を抱いていた。

梅雨空の合間から見える水色と同じ色の表紙には、シンブルで飾り気のない白壁の前に満面の笑みで寄り添う女性が二人。年齢的には私とそう変わらないんじゃないだろうか。表紙の二人を探して、ばらばらとページを捲る。

「姉妹、か」

元々は姉がパン職人をしていて、妹は趣味の洋菓子作りを活かし、一緒にカフェを

開いたというものだった。二人の苦労や経験、失敗から学んだことなどが時系列で整理して記されている。それらの文字に視線を滑らせただけで、本を閉じてしまった。

仲のいい姉妹。好きなことを極めるために専門学校に通わせてくれた両親。工務店を営む父の手助けもあり、居抜き物件の改装も上手くいったというのを見て、私には縁のない世界なんだ、とそれ以上読む気になれなかった。

何を期待してこの本を手にとったのだろう。自分にはないものに恵まれた人。彼女たちのように、ミツさんのように、店を持つことへの憧れでもあったのだろうか。

それから、ぼうつと流れの速い雲を眺め、雨上がりの青臭い風を感じながら、いつの間にか眠っていた。

何もしないでいるというのは、時間の流れが早い。ミツさんの弁当屋で働いていた頃は毎日忙しくしている方が時が経つのが早くて、休日の方がゆっくりな気がしていたが、必ずしもそうではないらしい。家に引きこもり、最低限の家事をする以外は寝て過ごしていると、一日があつという間に過ぎるようになった。

体が重い。頭が重い。ついでに、まぶたも重い。次に寝たらこのまま一生目が覚めないんじゃないかと思うくらい、馬鹿みたいに寝ていた。

そうしているうちに、図書館から借りていた本の返却日になっていた。通常の貸出

期間は一週間。返却日前日から雨が続き、一週間延長してもらっていたが、今日がその返却日だということに、六月のカレンダーに書き込んだ丸印で気が付いた。

「あー、梅雨はもういいよお」

はじめ、むしむし。ようやく雨が止んで喜んだのに、梅雨の湿気がじつとりと肌にとまわりつく。手櫛を通した髪の毛までもこわついているのがわかる。

家を出てすぐの循環バスの停留所に貼られた時刻表に、今の時間——午後一時の場所を見つけて人差し指を当てた。バスが来るまで、あと十五分。

やつぱり体が重い。急激に太ったわけでもない。具合が悪いわけでもないが、とにかく体が重くて怠い。母と暮らす私の食事の栄養面は問題ないはずだが、母以外の誰とも話さない、時間にも縛られない生活というのは、生きていく上で大切な何かを確実に蝕んでいるような気がする。

スマホを解約し、父から追われることもないのだから自由に暮らせているはずなのに、ふととてもない孤独感や疎外感に苛まれるのはどうしてだろう。寝すぎて凝り固まった首筋から肩をほぐすように腕を回し、伸びをし、空虚なため息を宙に吐いた。あぜ道の途中にぼつんと立つバス停は、時刻表が傾き、太陽を遮る待合所もない。中学のときからある錆びついた青いベンチに腰掛け、湿ったシャツの襟を摘まんではおめかせた。

山の麓まで広がる畑から、太陽を透かす薄雲のかかった空へと視線を滑らせ、水筒の麦茶を喉に流し込む。十分ほどそうしていると、住宅地の方から白髪の男性が広い歩幅で向かってくるのが見えた。男性は片手を挙げ、「おーい、こんにちは」と声を張り上げた。

チョコレート並みに焼けた肌は陽光を反射して鈍く光っていた。髪の色と目じりの皺の深さから見ると七十歳は超えていそうだが、タンクトップと短パンから覗く筋肉質な手足は四十代くらいにも見える。ずっしりと重そうなえんじ色のリュックを膝にのせ、私の隣に腰を下ろした。

「久しぶりやな、ことりちゃんやろ」

焼けた顔に白い歯がにと広がる。

「えっと、はい。そうですけど……」

「帰ってきたとは聞いてたけど姿を見んから、ほんまかいなと思ったわ。へえ、大きくなって。べっぴんさんに磨きがかかったんとちゃうか」

あつはっは、と笑う男性は、私の表情を見て「おっちゃんのこと覚えてへんのか」とさらに笑う。あまりにも大きな笑い声に、地面に降りたスズメが驚いたように飛び立った。

ら、うちの裏で紫蘇畑やりよるやん。神社の近くの」

「赤紫蘇の——」

私の言葉にかぶせて、畠中さんが「せや」と満足そうに頷く。

「明日の朝、また赤紫蘇持つて行くわな。紫蘇ジュース好きなんやろ。昔、お母ちゃんが娘が好きなんやうって言ううとったわ」

この時期になると母が紫蘇ジュースを作ってくれていたのを思い出す。学校から帰って母が用意してくれた、氷をたっぷり浮かべたルビー色の紫蘇ジュース。甘酸っぱくて、炭酸を入れると爽快感がプラスされる。梅雨時期の密かな楽しみだった。

「おっちゃんの子の孫の店行ってくれたか？ クラウンちゅー喫茶店なんやけど。ええセンスしとるんやで」

「実はまだ……。でもお店の前は通りました。平日なのにお客さんが結構入っていて、素敵な雰囲気でした」

「せやろ。ここらは年寄りばかりで、土日も平日もないからな。一時はどうなるや思たけど、最近ほ浩二の愛想も良うなつて——お、バス来たで。おう、みんな揃つとなあ」

運賃箱に百円を入れ、畠中さんは後部座席の顔馴染みらしい人たちの輪に加わった。私は運転席に近い椅子に腰を下ろし、楽しそうな声を聞きながら、後方へと流れる

のどか
長閑な田舎の風景を眺めていた。

畠中さんと他の乗客は白鷺地区の公民館で下車し、バスは私一人を乗せて陽ノ江地区に向かう。役場前のバス停で降り、Uターンして走り去るバスに頭を下げてから、正面玄関の自動扉をくぐった。

カウンターで本を返却し、一時間ほど館内を見て回ってから、手ぶらで図書館を出た。

「こんにちは」

声をかけられ、愛想笑いを浮かべながら会釈を返す。役場の玄関横の店舗に、営業中の看板が立てられていた。

洋食 黒猫

挨拶をしてきた灰色の短い髪に三角巾を結んだ小太りの女性が、もう一度私に微笑みながら会釈をして店に入った。

役場と同じクリーム色の壁は所々に染みがある。使い込まれたキッチン、日焼けしてくすんだグリーン色のテーブルクロスがかけられた六卓の丸テーブル。メニューが書かれた黒板が壁に貼り付けてあるだけの、シンプルな内装だ。玄関横のモンスターが艶々な緑を添えている。

店主と思しき小柄な白髪の男性がキッチンから出てきた。壁のメニューボードのずれを人差し指で調整し、真正面、真横から確認し、満足したようにキッチンに引つ込

んだ。

「あ——」

メニューボードの三つ目に書かれたハンバーグ定食に見覚えがある。島に引越してすぐ、諸々の手続きを済ませた母に連れてこられた店だ。中学生にもなった私は、母との暮らしにお金の余裕がないことはわかっていたので、一番安いチキンライスを注文しようとした。だが、母は引越祝いだからとハンバーグを頼んでくれたのだ。運ばれてきた料理には、チーズがおまけされていた。糸を引くとりとしたチーズと柔らかい煮込みハンバーグ。夢中で食べる私を幸せそうに見る母の顔と、テーブルに落ちる白い陽だまりの記憶が、確かな温度をもって蘇る。

「いらっしやい」

さっきの女性が店主とお揃いの黒いエプロンの紐^{ひも}を結びながらやってきた。

「ハンバーグ定食をお願いします」

注文を受けた女性がキッチンに入ると、店主の男性が調理を始める音が聞こえて、やがてデミグラスソースのいい香りが店内を満たしていく。

あの日と同じ、チーズがおまけされた煮込みハンバーグと、滑らかな舌触りのポテトサラダ。野菜たっぷりのスープも絶品だ。BGMもない、客は私だけの静かな店内と美味しい料理。洗練されたお洒落な店にはほど遠い、言葉は悪いがどこにでもある

ような店。だが、そこで出される料理は他では味わえない、ここだけのものだ。干からびた魚の如く氣力を失いつつあった心に、そつと優しい刺激を与えてくれる味だった。

定食の値段は六百五十円。そんな値段で採算が取れるのだろうか。今度はお母さんも一緒に——と思ったら、会計の際に「実は今日が最後の営業日なんですよ」と女性が申し訳なさそうに言った。

「夫婦で新婚当初からやってきたんですけど。せつかく来てくれたのに、閉店の話なんてね……ごめんなさいね」

お釣りを受け取る私に女性は「でもね」と続けた。

「ここ、七月からイベントスペースになるんですって。地元のお野菜を売ったり、手芸教室だったり、いろんな催し物ができるようにするみたい。それはそれで楽しみよねって主人と話してるんです。古いものがなくなっても、また新しいものが生まれる。寂しいけれど、新たな人の縁が生まれるなら、それも素敵なんじゃないかって思うんですよ」

主人、と呼ばれた店主が、キッチンから顔を出して会釈した。

女性の言う通り、役場の玄関にある掲示板には「洋食黒猫、六月閉店。七月より、イベントスペースとなります」と書かれた小さな紙が貼られてあった。

「ねえ、これ手伝って」

夕飯と風呂を済ませて居間の扇風機で火照りを冷まししていると、ザルに山盛りの赤紫蘇を抱えた母が、引き戸の木枠を器用に肩で押し開けた。今朝、畠中さんが赤紫蘇を持ってきてくれたらしい。他愛のない話をしている間も、母の手元は無駄なく動き続ける。私の倍の速さで葉を千切ってくれたおかげで、作業はあっという間に終わった。「今日はことりがやってみる？」

母が底の深い鍋をコンロにのせて言う。頷くと、嬉しそうに無数の皺を刻んで笑った。シミやそばかすが散った肌は乾燥も酷い。あまり自身のケアをする方ではなかったし、還暦を過ぎたせいもあるだろうが、今どきの母の年齢の女性はもつと若々しい。父と離婚してのんびり暮らせているはずなのに。昔のストレスや過労のせいもあるのだろうか。

「ことり、お湯が沸いたよ」

「ああ、うん。ごめん」

「火を使つてるときにぼんやりしちゃ危ないでしょう。鍋の縁、触っちゃ駄目よ」
まるで初めて台所に立った子供に注意を促すような口ぶりの母に、ついそつけない態度を取ってしまう私は、まだまだ精神的に幼い。母の指示通りに鍋に赤紫蘇を入れ

る。ふさふさだった赤紫蘇が、しなりと嵩^{かさ}を減らした。透明だったお湯が、みるみる濁ったような赤茶色に染まっていく。

母がまた「火傷、気を付けてね」と念を押すのにうんざりしながら頷く。ザルで濾し、葉を取り除いた汁を再び鍋に戻した。そこに砂糖——その量が文字通りの「てんこもり」で躊躇^{ためら}うが、「これくらい入れないと長期保存ができない」らしいので、思い切つて鍋に流し入れた。

「はい、レモン汁ね」

レモン汁の入った小皿を受け取り、濁った汁に回し入れると……

「わあ、綺麗」

濁った赤茶色が、魔法をかけたみたいに鮮やかな赤色に変わった。煮沸消毒をした瓶に移すと、それはさらに透き通っていて、宝石のルビーを溶かしたみたいだった。

完成した赤紫蘇ジュースを氷を入れたグラスに注ぎ、炭酸水で割る。居間のテーブルを挟んで母と向かい合い、小さな気泡が弾けるグラスをストローでかき混ぜた。

「ことりが帰ってきてからお母さんは毎日楽しいけど、ことりはどう？ やっぱ戻りたいんじゃない？」

「そんなことないよ。まあ、戻りたくなったら適当に戻るから」

父から逃げるために戻ったなんて言えない。母の前で父の話をするのは、今の平穩

な暮らしを壊すことにもなりかねない。

「お弁当屋さんのバイト、楽しそうだったじゃない」

「そうかな」

「新人の男の子だっけ。あの子のことを話してるとき、ちょっと楽しそうだったよ」

口に含んでいた紫蘇ジュースが気管に入って激しく咳き込んだ。

「やめてよね。ノリは軽いし、能天気だし、すっごい派手なんだから」

「でも、ことりからお友達の話聞くことってなかったからね。愚痴ばかりだったけど、ちょっと楽しそうな感じ。いいお友達ができたんだって、お母さん嬉しかったよ」

「もう辞めたんだし、関係ないよ。ごちそうさま」

空のグラスを持って立ち上がり、居間の引き戸を開ける。

「男の人は苦手なの。わかってるでしょ」

冗談で言ったつもりなのに、「そっか……そうよね」と呟いた母の声は、寂しそうに聞こえた。

「ことり、料理は昔から上手だったけど、また腕を上げたわねえ」

久々の休日となった母が味噌汁を飲み、焼き鯖の身をほぐしながら感慨深く頷いた。

「まあ、私も一人暮らしが長いからね」

言いながら、昨夜の残り物のきんぴらごぼうを、ごはんのにせた。昨日よりも味が馴染んだ甘辛いきんぴらごぼうは、ごはんによく合う。

「駄目なお母さんを持つと子供がしつかりするんだって。うちは当たってるなーと思っただけ」

何それ、と鼻で笑って、ごはんを一気にかき込んだ。

「お母さんは駄目じゃないでしょ」

母は駄目な母親どころか、頑張りすぎな母親だ。離婚した責任でも感じているのか、なんでも完璧にこなそうとする。私をもっと適当でいいんじゃないと言っても変わらない。だからと言って私が手伝おうとすると、些細なことにも「危ないからね」と遠ざける。

高校から島を出るときだって、ついてこようとするのを必死で説得したのだ。そういえばあの頃、ツバキさんが母に寄り添ってくれていたから島を出られた。今頃になつてそんなことを思い出す。

片付けを済ませて居間に戻ると、母はすでに着替えを済ませ、バッグにスマホを仕舞っているところだった。

「出かけるの？」

「この前、臨時集会に出られなくてね。今日もあるみたいだから行ってくる」